

平安初期和文における接続助詞ド・ドモの機能

江原由美子

1 はじめに

接続助詞ドとドモは、モの有無という形態上の差があるにも関わらず、同じ意味・機能を持つものとして扱われることが多い。築島裕（1954）の「和文では逆接条件を示すのに「ど」「ども」を用ゐ、しかも「ど」を殊に頻用するけれども、訓讀文では「ド」は全く認められず、接続助詞は「ドモ」ばかりである」という文体差や、それを書き手の問題として捉えた位相差（ドは女性、ドモは男性が使用）が指摘されているが、通時的にドとドモの違いを説明するには至っていない¹⁾。従来の研究では、各資料の性質とド・ドモの用例数には注目しているものの、ドとドモが共に用いられている和文において、二形式にどのような違いがあるのかは考えられていないのである。

本稿では、ド・ドモの使用数が拮抗している平安初期の『竹取物語』（以下、竹取）と『土佐日記』（以下、土佐）を中心に、成立年代が近いと目される『伊勢物語』（以下、伊勢）、『大和物語』（以下、大和）を含めた四作品から、ドとドモに機能面での差異があることを提示する。四作品を対象にしたのは、これら四作品は筆者が男性だと考えられるものや、男性の可能性のあるものであり、ドが圧倒的に優勢な女性による和文とは、一応分けて考えるべきだと思われるからである。また、和歌は音韻律が問題となるので別稿を用意し、本稿では和歌以外の用例から論じることとする。使用テキストは、竹取、伊勢、大和は岩波新日本古典文学大系で、大和は岩波日本古典文学大系である。各資料におけるド・ドモの用例数は以下のとおりで、括弧内が和歌以外の用例数である。

	竹取物語	伊勢物語	土佐日記	大和物語	計
ド	19(19)	52(41)	21(13)	111(82)	258(161)
ドモ	20(20)	11(4)	14(12)	20(4)	109(41)

2 先行研究とその問題点

ド・ドモは順接の確定条件（已然形＋バ）に対応する、逆接の確定条件とされ、先行研究では、条件表現の体系における位置づけや、順接の条件表現との対応関係が注目されてきた。そのような先行研究の中で、ド・ドモの意味・用法を詳細に記述しているものには、湯澤幸吉郎（1936）や山口堯二（1980）がある。湯澤幸吉郎（1936）は、「事實を表す用言・活用

連語に附いて「然れども」の意を表す」(〔丙〕)、「一定の条件の下に、下に述べる事件(意味の上ではその条件に適応せぬ事柄)が起るものである事を示す」(〔丁〕)、「何等かの点において相違のある二事実を、対照して示す」(〔戊〕)の三つの用法を指摘している。一方、山口堯二(1980)は、確定条件法のド・ドモに認められる意味関係として、「両句の事態が意味上対立する対立性の関係」と「前句がいわば前置きのように用いられる関係(前置性)」を指摘し、そのうち「対立性の関係」を因果対立性・因由不在性、期待無効性、二者対比性・反面随伴性、意志対抗性に細分化している。しかしながら、これらの先行研究では、ド・ドモが同じ意味・用法を持つものとして扱われ、逆接の確定条件を表すのになぜ二つの形式が必要であったのかは考えられていない。本稿では、その問題を解決する糸口として、また、条件表現の体系を精密化するために、ドとドモの違いを論じることとする。

先行研究では、また、ド・ドモの意味・用法として、次の四点が指摘されている。

(Ⅰ) 前件の事実の後件が拘束されないことや反対になることを示す。

(Ⅱ) 前件の事態と後件の事態が常に照応しないことを示す。

(Ⅲ) 前件に存在しない事柄を挙げ、それが存在したとしても後件の事態がそれに影響をうけないことを示す。

(Ⅳ) 軽くただ続けていくことを示す。前置きの用法。

(Ⅰ) はいわゆる逆接の確定条件で、すべての先行研究が指摘しているものである。桜井光昭(1959)、西田直敏(1971)、阿部八郎(1985)は、この(Ⅰ)の用法としてドモにのみ湯澤幸吉郎(1936)の〔戊〕を指摘している。(Ⅱ) はいわゆる逆接の恒常条件で、林大(1955)が「常定の条件」としたものである。他に、桜井光昭(1959)、此島正年(1966)²⁾、西田直敏(1971)、飛田良文(1970)、阿部八郎(1985)がこれを指摘している。また、塚原鉄雄(1958)は、これを(Ⅰ)に含まれる条件としている。(Ⅲ) は仮定条件に近いもので「修辭的確定」(森野宗明(1967))とも言われ、西田直敏(1971)は(Ⅰ)に含まれる条件だとしている。森野宗明(1967)、阿部八郎(1985)はドとドモの両方に指摘し、飛田良文(1970)はドモにのみ指摘している。また(Ⅳ)は、西田直敏(1971)、阿部八郎(1985)はドモにのみ指摘しているが、飛田良文(1970)はドにのみ指摘している。これらの先行研究では、対照性(湯澤幸吉郎(1936)の〔戊〕)や(Ⅲ)がドモにのみ指摘されたり、(Ⅳ)がドとドモのどちらか一方にのみ指摘されたりすることはあるが、ドとドモの意味・用法における決定的な違いは指摘されていない。それは、「ドモ」は「ド」に「モ」を添へた語で、この方が一層明確な叙述になる」(築島裕(1954))と解されたためだと思われる。また、前件と後件の論理関係の解明に重点が置かれていたため、同じ論理関係を表すドとドモの違いはあまり注目されることがなかったのだと言える。

そのような中で、ドとドモの違いに着目し記述しているものに、『万葉集』を対象にした菅原真智子(1973)がある。氏は『事態の対立関係による構成』では、「ども」が圧倒的に多く用いられ、『事態の前後関係による展開』では、「ど」が多く用いられる」とし、「逆態接続は「ど」が分担し、「も」は対立性の明示、あるいは、逆態関係の強調を分担した」としている。しかしながらこの説明も、モの担う働きと、ドとドモの機能とがうまく関連づけられているとは言い難い。例えば、「漕げども\」(土佐)のような同一句による反復はドには見られないが³⁾、ドモがドの強調形で、ドとドモが強調的意味の無標形と有標形という対立をなしているのであれば、「漕げど\」といった表現が見られてもいいはずである。モは単なる強調ではなく、ドとドモを分かつ重要な働きを担っているのではないだろうか。以下、本稿では、前件と後件の事態関係から、ドとドモの違い、そしてドモのモが担う働きについて考えていくことにする。

3 ドの前件と後件の事態関係

ドの前件は、一回的な事態であることが多い。この一回的な事態には、(1)の「いひやる」、(2)の「さても侍ひてしがなと思ふ」のように、動作の回数が一回であるものもあれば、(3)の「この戸あけたまへ」とたゝくのように、戸を打つ動作自体は複数回行われるが、その戸を打つ動作全体で一回的な「たゝく」動作として捉えられるようなものもある。

- (1) むかし、おとこ、契れることあやまれる人に、山城の井手の玉水手にむすびたのみしかひもなき世なりけりといひやれど、いらへもせず。(伊勢・一二二)
- (2) さても侍ひてしがなと思へど、公事どもありければ、えさぶらはで、夕暮に帰るとて、忘れては夢かぞ思ひきや雪ふみわけて君を見むとはとてなむ泣く\来にける。(伊勢・八三)
- (3) おとこ、宮仕へしにとて、別れおしみてゆきにけるまゝに、三年来ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、今宵逢はむとちぎりたりけるに、このおとこ来たりけり。「この戸あけたまへ」とたゝきけれど、あけで、歌をなんよみて出したりける。(伊勢・二四)

しかし、ドの前件は常に一回的な事態ではない。次の(4)は「千度思ふ」という複数的な事態であり、(5)は「しば\行く」という習慣的な事態、(6)は「夜晝精進潔齋して、世間の佛神に願をたてまどふ」という持続的な事態である。

- (4) はじめは何人の詣でたるならむと聞きゐたるに、わが上をかく申(し)つゝ、わが装束などをかく誦經にするをみるに、心も肝もなく悲しきこと物に似ず。走りやいでなましと千度思(ひ)けれど、おもひかへし\居て夜一夜なきあかしけり。(大

和・一六八)

(5) 昔、おとこ、色好みと知る、女をあひいへりけり。されどにく、はたあらざりけり。しば／行きけれど、猶いとうしろめたく、さりとて、行かではたえあるまじかりけり。(伊勢・四二)

(6) 「法師にやなりにけむ、身をや投げてけむ。法師になりたらば、さてあるともきこえなむ、身をなげたるなるべし」とおもふに、世(の)中にもいみじうあはれがり、妻子どもはさらにもいはず、夜襲精進潔齋して、世間の佛神に願をたてまどへど音にもきこえず。(大和・一六八)

以上のように、Dの前件は一回的な事態が多いが、複数的な事態や習慣的な事態、持続的な事態も前件になりうる。しかしながら、前件と後件の対立のあり方は、前件にどのような事態が来ていても同じである。前件が一回的な事態である(1)～(3)は、後件の「いらへもせず」、「えさぶらはで、夕暮に帰る」、「あけで」も一回的な事態である。前件が複数的な事態である(4)は、後件も「おもひかへし／居る」という複数的な事態である。前件が習慣的な事態である(5)は、後件が「猶いとうしろめたし」という持続的な感情であり、どちらも持続する事態であると言える。また(6)は、帝の御葬の夜から良小将がいなくなり、人々が良少将を探している場面である。この話では後に、喪明けの日に良小将が法師として生きていることを人々は知った、ということが述べられており、この時点での良小将の安否は定かではない。よって後件の「音にもきこえず」は、持続的な事態だと考えられ、前件と後件はどちらも持続的な事態であると言える。このようにDは、前件と後件が一回的な事態同士や複数的な事態同士、持続的な事態同士という、対等の資格にある事態の対立を示すのである。本稿では、このようなDによる対立を「均衡対立」と呼ぶことにする。

ところで、Dには次のように、「均衡対立」に見えない例もある。これらは前件の主題や動作主体が複数で、後件の主題や動作主体が単数となっている。

(7) 他人／のもありけれど、さかしきもなかるべし。(土佐)

(8) この人々、ある時は、竹取をよび出て、「娘を、吾に賜べ」とふし拝み、手をすりたまへど、「そのが生さぬ子なれば、心にも従はずなんある」と言ひて、月日過ぐす。(竹取)

(9) 昔、ならの帝につかうまつる采女ありけり。顔容いみじうきよらにて、人人よばひ、臈上人などもよばひけれど、あはざりけり。(大和・一五〇)

しかし、これらも実際は、前件の主題や動作主体の個々と、後件の主題や動作主体が対立している。(7)は、前件の主題が「他人／の(＝他の人々の歌)」という複数であるが、その「他人／の」に属する歌全部を一まとめとして、「さかしき(＝上手な歌)」ではないと

ということが描かれている。(8)は、前件の動作主体が「この人々」という複数であるが、「娘を、吾に賜べ」という表現からも分かるように、ここで描かれているのは個人個人の求婚であり、その個人個人に対して後件の動作主体「竹取」が返事をしている。(9)も同じで、「人々」「殿上人など」といった前件の動作主体が一緒になって「よばふ」のではなく、個人個人で「よばふ」のであり、その個人個人に対して後件の主体「采女」は「あふ」ことをしないのである。よってこれらも、前件と後件の事態の対立のあり方を見ると、「均衡対立」をなしていると言える。

4 ドモの前件と後件の事態関係

一方、ドモの前件は、量的に複数となる事態や時間的に持続する事態、質的に甚だしい事態である。それは、動作主体の数や動詞の語彙的意味、目的語や連用修飾語、文脈などによって示される。

まず、前件の動作主体が複数の例である。(10)(11)は「宮司、さぶらふ人々、みな」、「船にあるおのこども」がそれぞれ「求めたてまつる」、「国に告ぐ」という動作を行っており、前件は複数的な事態である。(12)は「これかれ」が皆、同じ歌に対して「あはれがる」という状態にあり、前件は質的に甚だしい事態であると言える。

(10) 宮司、さぶらふ人々、みな、手を分かちて求めたてまつれども、御死にもやしたまひけん、え見つけたてまつらずなりぬ。(竹取)

(11) 浜を見れば、播磨の明石の浜也けり。大納言、「南海の浜に吹き寄せられたるにやあらん」と思ひて、息づき、ふし給へり。船にあるおのこども、国に告げたれども、国の司まうでとぶらふにも、え起きあがり給はで、船底に臥し給へり。(竹取)

(12) この歌を、これかれあはれがれども、一人も返しせず。(土佐)

次に、動詞の語彙的意味によって、前件の事態の複数性や持続性、質的な甚だしさが示されている例である。(13)は、「ありわたる」という前件の動詞の語彙的意味から、前件の事態が持続的であることが分かる。(14)は、会話文に示されているような色々な根拠を挙げて「言ふ」ことを行っており、文脈から「言ふ」の意味は「説得する」だと考えられる。説得は複数的に色々な方法で行われることであるから、この前件は複数的な事態や質的に甚だしい事態だと言える。また(15)も、「制す」は複数的に、もしくは厳しく行われることであるから、前件は複数的な事態や質的に甚だしい事態だと考えられる。

(13) この筑紫のめ忍びて男したりけり。(中略)かゝるわざをすれど、本の妻いと心よき人なれば、男にもいはでのみなむありわたりけれども、ほかのたより、かく男すなりときいて、この男、おもひたりけれど、心にもいれで、たゞさる物にて置き

たりけり。(大和・一四一)

(14) 楫取のいはく、「これは、竜のしわざにこそありけれ。この吹風は、よきかたの風なり。あしきかたの風にはあらず。よきかたにおもむきて吹くなり」と言へども、大納言は、これを聞きいれ給はず。(竹取)

(15) かやうに、御心をたがひに慰め給ほどに、三年ばかりありて、春のはじめより、かぐや姫月のおもしろく出たるを見て、常よりも、物思ひたるさま也。ある人の、「月の顔見るは、忌むこと」と制しけれ共、ともすれば、人間にも月を見ては、いみじく泣き給ふ。(竹取)

次に、目的語から前件の事態の複数性が示されている例である。(16) では「よろづの物」によって、前件の事態「食ふ」が多回行的に行われたことが示され、(17) では「こ、かしこ」によって、前件の事態「求む」が複数回行われたことが示されている。この(17)は、前件の動作主体も「ともだち・妻」という複数である。

(16) よろづの物食へども、なを五條にてありし物はめづらしうめでたかりきとおもひいでける。(大和・一七三)

(17) ともだち・妻も「いかならむ」とて、しばしはこ、かしこ求むれども、音耳にもきこえず。(大和・一六八)

次に、連用修飾語から前件の事態の持続性や複数性が示されている例である。(18) では「例も」によって、「月をあはれがる」という前件の事態が習慣的に行われていることが示され(19) では「さき／も」によって、「申さむと思ふ」という前件の事態が何度も何度も反復的に、複数回あったことが示されている。

(18) 「かぐや姫の、例も月をあはれがり給へども、このごろとなりては、たゞことにも待らざめり。いみじくおほし嘆く事あるべし。よく／見たてまつらせ給へ」(竹取)

(19) かぐや姫、泣く／言ふ、「さき／も申さむと思ひしかども、「かならず心まとはし給はん物ぞ」と思ひて、いままで過ごし侍りつるなり。(竹取)

そして、文脈から前件の事態の複数性や質的な甚だしさが示されている例である。(20) は人々の様子から、前件の海の荒れ方が甚だしいものであることが示され、(21) は「夜ごとに」から、「いく」という前件の事態が複数の回数に行われていたものであることが示されている。

(20) かくあるを見つ、漕ぎ行くまに／、山も海もみな暮れ、夜更けて、西東も見へずして、天気のこと、楫取の心に任せつ。男も慣らはぬは、いと心細し。まして、女は船底に頭を突き当てて、音をのみぞ泣く。(中略) これらを人の笑ふを聞いて、海は荒るれども、心は少し風ぎぬ。(土佐)

(21) むかし、おとこ有けり。東の五條わたりにいと忍びていきけり。みそかなる所なれば、門よりもえ入らで、童べの踏みあけたる築地のくづれより通ひけり。人しげくもあらねど、たびかさなりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に、夜ごとに人をすへてまもらせければ、いけどもえ逢はで帰りけり。(伊勢・五)

また、次のように前件に複数の事態が提示される場合もある。

(22) 「神ならねば、何わざをか仕うまつらむ。風吹き、浪はげしけれども、雷さへ頂に落ちかゝるやうなるは、竜を殺さんと求め給へば、あるなり。はやても、竜の吹かする也。はや、神に祈りたまへ」と言ふ。(竹取)

以上のように、ドモの前件は量的に複数である事態や時間的に持続する事態、質的に甚だしい事態である。それでは、ドモの前件と後件の対立のあり方はどのようなものであるかという、質や量において差のある二つの事態の対立である。例えば(10)では、前件の「求めたてまつる」は複数的な事態であり、その手段や方法は多様であると考えられるが、後件の「え見つけたてまつらず」は、複数の動作主体それぞれが至った結果であるとは言え、多様性がなく、均一の事態であると考えられる。よって前件と後件は、複数的で多様な事態と均一で多様ではない事態との対立をなしていると言える。(11)(12)、(14)～(17)、(19)～(22)もこの対立をなしている。また(13)では、前件の「いはでありわたる」という持続的な事態と、後件の「かく男すなりときく(＝耳に入る)」という一回的な事態が対立している。(18)では、前件の「例も月をあはれがり給ふ」という習慣的で持続的な事態と、後件の「このごろとなりては、たゞことにも侍らざめり」という新しい事態、つまりは相対的に持続的ではない事態とが対立している。このように、ドモは質や量の面で差のある二つの事態の対立を示すが、必ず前件の事態の方が甚大な事態である。このようなドモによる対立を、本稿では「不均衡対立」と呼ぶことにする。

5 ド・ドモの機能差

ドとドモは前件と後件の事態の関係において違いが見られ、ドは「均衡対立」、ドモは「不均衡対立」を示す。そして、そのようなドとドモの違いは、モの有無という形態差から生じていると考えられる。ドモは接続助詞ド+係助詞モだとされているが⁴⁾、係助詞モは、「同類のものが他にあることを前提として主題を提示する」(細川英雄(1985))機能を有する。このモの働きにより、ドモの前件は複数的な事態や持続的な事態、質的に甚だしい事態となっているのである。

ドとドモの違いが最も顕著に現れているのは、反復表現である。同一句による反復はドモには見られるが、ドには見られない。それは、ドモのモが類例の提示や列挙という働きを担

うからだと考えられる。

(23) この泊、遠く見れども近く見れども、いとおもしろし。(土佐)

(24) かく言ひて、眺めつゝ来る間に、ゆくりなく風吹きて、漕げども、後方退きに退きて、ほとしくうち嵌めつべし。(土佐)

(23) では、前件で、「この泊」に対する「遠く見る」、「近く見る」という複数的、多回的な事態が描かれ、後件で、前件から期待される唯一の結果「泊に趣深くない部分が見つかる」が導かれず、それに反する「いとおもしろし」が生じたことが描かれている。また(24)では、前件で、「前進する」という目的のために行われる「漕ぐ」という事態の反復が描かれ、後件で、その目的が達成されず、目的に反した「後方退きに退く」が生じたことが描かれている。このようにドモの前件には、一つの目的や一つの物に対する複数の事態が描かれ、後件にはその目的が達成されなかったことや、前件から期待される結果が導かれなかったことが示されている。ドモは複数の事態と、その複数の事態から期待される唯一の結果に反する事態の対立を示すと言え、その際ドモ節は、期待に反する事態の成立を阻止する、最大の条件としても働いている。先行研究ではドモにのみ対照性が指摘されることもあったが、それは、ドモが室や量の面で差のある二つの事態を対立化させて示すため、前件と後件の違いが際立つことになるからであろう。

一方、ドにも次のように反復的に見える例はあるが、これらでは「立ちてみ、みてみ」、「と見かう見」という反復的な部分はその後に来る「見る」の説明であり、ド節自体が反復しているわけではない。前件で示されているのは複数的な事態ではなく、「どのように見る場合も」という全ての条件での事態であり、全体で一回的な「見る」動作が描かれていると考えられる。

(25) むかし、東の五条に大后の宮おはしましける、西の対に住む人有けり。それを本意にはあらで心ざし深かりける人、行きとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。(中略) 又の年の正月に、梅の花ざかりに、去年を恋ひて行き、立ちてみ、みてみ見れど、去年に似るべくもあらず。(伊勢・四)

(26) この女かく書きをきたるを、異しう、心をくべきこともおほえぬを、何によりてかかゝらむと、いといたう泣きて、いづかたに求めゆかむと、門に出でて、と見かう見見れど、いづこをはかりともおほえざりければ、かへり入りて、思ふかひなき世なりけり年月をあだにちぎりて我や住まひし といひてながめをり。(伊勢・二一)

(25) では、「姿を隠してしまった女の面影を求める」という目的のために行われる、「立ちてみ、みてみ見る」という前件の事態と、その目的が達成されず生じてしまった「去年に似

るべくもならず（＝面影は見当たらない）」という後件の事態が、対立的に示されている。また(26)では、「門に出でて、と見かう見見る」という前件の事態と、そこから予想される「探す見当がつく」という事態に反する、「(見当がつかず) かへり入りてながめをり」という後件の事態が、対立的に示されている。このようにドは、対等の資格にある二つの事態を対立的に示すと言える。

ドとドモは、前件と後件の事態が同時に成立することもあれば、継起的に成立することもある。しかし、話し手や書き手の事態認識という観点から考えると、「不均衡対立」を示すドモは、対立する二つの事態の釣り合いが取れていないと判断された時に用いられていると言え、その判断を下した話し手や書き手の主観性が強く表れることになる。一方「均衡対立」を示すドは、対立する二つの事態が対等の資格にあるので、ドモのように話し手や書き手の主観性が表れず、同時性や継起性といった事態同士の関係が強く表れることになる。先行研究はそういった解釈的側面からド・ドモの違いを考えるに留まっており、一番重要な機能面での差異を見落としていたと言える。

6 まとめ

ドは前件と後件が一回的な事態同士や複数の事態同士、持続的な事態同士という、対等の資格にある事態の対立を示す。このようなドによる対立のあり方を、本稿では「均衡対立」と名付けた。一方、ドモの前件は複数の事態や持続的な事態、質的に甚だしい事態であり、ドモは質や量面で差がある二つの事態の対立を示す。このようなドモによる対立のあり方を、本稿では「不均衡対立」と名付けた。本稿が提示したドとドモの違いは、同時代の和歌や『万葉集』の和歌などにおいても言うことができると思われるが、それについては稿を改めたい。

注

- 1) 文体差や位相差以外にも、『延喜式』『祝詞』と『続日本紀』『宣命』を調査した佐佐木隆(1996)により、場面差(ドは私的で独自の表現、ドモは公的な場で使用)が指摘されている。しかし、公的な場でなされたと考えられる説経の聞書である『法華修法一百座聞書抄』はドの方が優勢(ド…20例、ドモ…8例(内、トイヘドモ…3例))であり、場面差でもドとドモの違いは説明できない。
- 2) 此島正年(1966)の指摘は、いわゆる恒常条件の用法が見られるというのではなく、松下大三郎(1928)の「現然仮定」の用法が見られるというものである。「具体的事実から抽象して一般的に想定して述べるところに仮定の要素が入って来る」と述べており、(Ⅱ)と(Ⅲ)の両方にまたがるような指摘と言える。しかしながら、松下大三郎(1928)の「現然仮定」は、阪倉篤義(1958)では「恒常確定」とされ、小林賢次(1996)では「恒常条件」とされており、(Ⅲ)よ

りも(Ⅱ)の用法に近いものだと考えられる。よって本稿では、此島正年(1966)の指摘も、(Ⅱ)の指摘として取り上げることにする。

- 3) 今回考察対象としなかった和歌には、「梓弓引けど引かねど昔より心は君によりにし物を」(伊勢・二四)というドによる反復表現も認められる。しかし、これは肯否の反復表現であり、前件で示されているのは複数の事態ではなく、「梓弓を引く場合も引かない場合も」という全ての条件での事態、つまりは恒常的な事態であると考えられる。
- 4) 成立に関しては、ドモからモを分離させてドが発生した可能性も示唆されている(森野宗明(1967))が、ドモの前件がドとは異なり、複数の事態や持続的事態、質的に甚だしい事態であることを考えると、ドモからモを分離することは不可能だと思われる。やはり、接続助詞ド+係助詞モから接続助詞ドモが発生したという方向の方が確実だと言える。

参考文献

- 阿部八郎(1985)「助詞総覧 2 接続助詞」『研究資料日本文法第7巻 助辞編(三) 助詞・助動詞辞典』明治書院
- 此島正年(1966)『国語助詞の研究—助詞史の素描—』桜楓社
- 小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 阪倉篤義(1958)「条件表現の変遷」『国語学』33(1975)『文章と表現』角川書店、所収
- 桜井光昭(1959)「ド」の研究」「ども」の研究」『国文学解釈と教材の研究』4-9
- 佐佐木隆(1996)『上代語の構文と表記』ひつじ書房
- 菅原真智子(1973)「上代の逆接確定条件法—「ど」と「ども」—」『王朝』6
- 塚原鉄雄(1958)「接続助詞—ば・ど・ども・とも・と・て・つつ・で・を・に・が—」『国文学解釈と鑑賞』23-4
- 築島裕(1954)「中古漢文訓讀文の文構造」『国語と国文学』31-9
- 築島裕(1963)『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』東京大学出版会
- 西田直敏(1971)「ど」「ども」『日本文法大辞典』松村明編、明治書院
- 林大(1955)「萬葉集の助詞」『萬葉集大成第六巻 言語篇』平凡社
- 飛田良文(1970)「ば・と・とも・ど・ども・も <ても> <けれども> <ところが> <ところで>」『国文学解釈と鑑賞』35-13
- 細川英雄(1985)「助詞総覧 4 係助詞」『研究資料日本文法第7巻 助辞編(三) 助詞・助動詞辞典』明治書院
- 松下大三郎(1928)『改撰標準日本文法』紀元社(訂正版、(1930) 中文館)
- 森野宗明(1967)「<接続助詞 古典語>ど」「<接続助詞 古典語>ども」『国文学解釈と教材の研究』12-2
- 山口堯二(1980)『古代接続法の研究』明治書院
- 湯澤幸吉郎(1936)「接続助詞「とも」「ど(も)」の用法」『国語解釈』1-4(1940)『国語学論考』八雲書林、所収

(えはら ゆみこ 岡山大学大学院修士課程)